

## 2. 教授・学習過程研究のある事例から

筆者の所属する慶応義塾大学の教育心理学研究グループでは6年間9回にわたって大学で研究を目的とした学習教室を地域の小・中学生を対象に開催し、その結果を公表してきた(安藤ら, 1992; 鹿毛, 1993b; 倉八, 1994など)。個々の研究者の関心は異なっている(ATI, 遺伝・環境問題, 内発的動機づけ, コミュニカティブアプローチなど)が、研究過程や被験者, データを共有する研究プロジェクトであった。このプロジェクトの特色としては、①研究者が子どもに「教える」経験を、②研究者がカリキュラムを開発する、③大学が社会に開かれることなどが挙げられる。①と③によって、研究者は研究活動に責任を負うことを通して研究者中心主義ではおれなくなり、実践志向的になる。また、②によって、研究者は複眼主義に立つようになり、理念を語りあうようになった。但し、「理論志向」と「実践志向」、あるいは「個々の研究者の関心の相違」と「研究の共同化」をそれぞれ両立させることの困難さなどが指摘でき、この研究方式の反省点も多かった。

## 3. 2005年の教育心理学に向けて

より豊かな教育心理学を創造するために、「心理学としての教育心理学」を越えて「教育学としての教育心理学」を目指すことを提案したい。実はこのことは「心理学」、「教育学」という枠組みにとらわれることなく、「教育実践の学」を志すことにはかならない。また、教育心理学という知のあり方を研究成果としての説明知にとらえるだけでなく、教育を「問う」態度によって、動的な研究活動としての実践知を創造することでもある。その一方で、人が何を感じ、思い、考えているのかを研究の出発点とする心理学的視点の重要性も指摘したい。この視点こそが他の教育学的アプローチと異なる点であり、「教育実践の学」に教育心理学という立場から参加する意義である。

## 指定討論の立場から

内田 伸子

## 相川充氏の提案について；

第1に、教育実践に根ざした研究は大いに進むこと、特に、「教育現場での問題や現象に対して理論やモデルを用いてアプローチする研究が主流を占めている」「学級介入の研究が増える」という予測が述べられた。これまで、こうした研究の必要性を言われながら、学会誌レベルではそのような研究が少なかったという実状に照らすと、このような研究を実現するための条件は何なのか疑問をもつ。子どもと対面してきめ細かに面接するというような研究はなかなか受け入れてもらえない実状がある。そ

もそも研究法が問題なのか？協力関係がうまくいかないのか？

第2に、女性研究者や若手研究者がこの領域で活躍するようになり、国際学会での活躍も期待されそうだと予測しておられ心強い思いがした。現実には、実際に研究している女性の約3分の1しか職に就けない実状がある。これから10年の間に、発達や教育の領域において、女性研究者にもっとポストを解放していただきたいと切に願っている。

## 秋田喜代美氏の提案について；

秋田氏の、教師や保育者の思考過程や成長についての研究成果に基づき継続的コンサルテーションの意義を説得的に論じられた。問題は心理学的視点で見つけた事実が現場の先生方にとってどういう意味があるのかという点にあるように思われる。秋田氏は「心理学の理論や概念にもとづいて説明し、意味づけることによって現場と関わることになる。しかし、現場に入っていたときに「心理学者の発言は現場でどのように受け取られているのか、また、発言の有効性を左右する条件は何かということになるとあまり考えられていない」と指摘されている。きちんと受け止めてもらうためにはどのような条件が必要かについては、秋田氏のような現場研究を積み重ねる中でわかっていく問題なのかもしれない。

## 奈須正裕氏の提案について；

学校教育、特に、授業づくりやカリキュラム開発に関心を持っている場合には、「いくつかの学校現場と日常的で継続的なおつきあいをし、全般的で雑多な問題をめぐって相談やお手伝いをする研究・開発活動、いわゆるコンサルテーションが研究者の主要な活動のスタイルの1つになる」と指摘されておられる。この指摘には、実践者と研究者の関係のあり方が大事だという主張が含まれていると受け取れる。問題は、研究者が具体的にはどう関わっていくか、両者の協力関係がうまくいく条件について、もっと明示化されることにより、実践研究についての方向付けが得られるのではあるまいか。

## 鹿毛雅治氏の提案について；

この提案の趣旨の第1は、「教育という現実に戻らないといけぬ。そのためには教育学の一領域として積極的に位置づけるべき」である。研究者の姿勢についての問い直しの発言だと思われるが、教育学の一領域に位置づけることによって何が変わってくるだろうか？

第2に、ここで提案されている「教育実験プロジェクト」は、誰もができるわけではない。①研究者が教える経験を、②カリキュラムを開発し、③大学が社会に開かれるということが出来るためには、学校の側が大学に開かれるということもなくてはならないだろう。

第3に、「〈心理主義〉批判を克服する方法論の構築」の必要性が述べられている。実践研究を重ねることによってぜひ、このような方法論を創り出してほしい。

#### 新しい方法論の模索へ：

共通する問題意識は、教育の研究者がコンサルテーションの役割をするということである。よりよいコンサルテーションを実現する基礎として教育学者の稲垣忠彦氏の提案する「カンファレンス」の考え方は見込みがあるのではなからうか。医者や臨床心理学者が行うカンファレンスと同様に、学校や研究会で、授業を協同で検討し、参加者の授業観、児童観、教材観を交流しつつ、その授業の検討をすすめる、参加者一人ひとりの力量を発展させるとともに、それを基盤に、教授＝学習の理論を形成していこうというものである。従来のように、各人教師の授業法を分析し、教授理論をつくるのではなく、もっと多様で多角的な視点が交錯し、いろいろな意見の中で教師の体験をより豊かにしていくことを通して、研究者も教師も共に豊かな教育理論と実践のあり方がわかっていくというのである。このやり方のよい点は、第1に、教師と研究者が同じ高さの土俵に立っているということ、第2に、何が正しいのかということに閉じ込めてゆかず、たとえば算数の授業であっても国語の授業のことについて示唆を得たり、1年生の授業を対象にしても、それが6年生にもあてはまることである。4氏が共通して提案していたように、研究者と実践者が同じ高さの土俵に立ち、共同で問題を追求することを通して、心理主義批判をされる研究や法則定立的方法論を超えるための方法論が乗り越えられるようになり、「教育実践に根ざした研究」が実現される可能性が拓かれるのではなからうか。

#### 実践はお遊びとして楽しんでください

岩井 勇児

#### 実践の苦手な人が実践を志向する

日頃、科学的と称する教育心理学研究にうさんくささを感じているのだが、話題提供者のレジメを読んでこれらの実践志向は何かおかしい、と言う感じがした。こうした私の直感は、話題提供者のシンポジウムにおける話題提供行動に現れた。

シンポジウムが終わったとき、二三の人からフロアの発言の機会がなかった不満を聞かされた。話題提供者が時間を奪ったからだ。実践とは状況に応じて臨機応変に対応することではないか。与えられた持ち時間を超過し、フロアのうんざりした雰囲気を見捨て、自分の用意したものをその場にあわせて変容することもできないなど、

シンポジウムの基本すら実践できない固い人たちの実践志向の話聞いていて、この人達は実践が苦手だから実践を志向するのだなと思った。心理学者は自分の苦手なことをやりたがる、という私の持論がまた強化された思いである。こんな印象に基づいてコメントしよう。

#### 現象の予想のみで中味が見えない（相川氏）

たとえば、学級介入の研究が増えたとして、それが教育心理学の研究や教育にどのような変化をもたらすのか、あるいは、現場の教師が大学で教育心理学を講じることでどんなメリットがあるのか、など見えてこない。しかも、こうしたことがすべて善である、という楽天的前提がある。しかし、現実はずっと厳しく、矛盾に満ちたものである。現場の教育研究が果たしてどれだけ子どもに目を向けているのか、子どもよりも別の目を気にした研究の権威づけに、大学が利用されているだけではないか、などの疑問だって出てくる。そう考えると、こうした現象が実現することが、子どもにとって今よりもよいことなのか、悪いことなのか、私にはよくわからない。

#### コンサルテーションは子どもを幸福にするか（秋田氏）

レジメの「つまづく、うまくいく、どうすればよい」などの用語から想像して、教師がうまく教育することを助けることがコンサルテーションとすると、たいへん危険な気がする。ひとつは、今でも教育過剰だと思うので、これ以上子どもが躓いたときうまくいくような教育などして欲しくないからだ。もうひとつは、言葉としては教師と研究者の柔軟な関係を説いているが、話の節々には、1事例に過ぎないことからかなり大胆にものをいっているような気がするからである。教育学者と違ってデータに基づくというが、心理学のデータは研究者の都合のよいように揃えることだって可能である。まだ事例を蓄積する段階で、ものは言わない方がいいのではないか。

#### 実践知などというのは実践無知だからではないか（鹿毛氏）

実践知などという OHP を見ていて、この人は実践知などと言わないと不安になる程度に、実践に無知なのかと思った。こうした次元なら、優れた洞察力のある教育学者の方がまだましなことを言うのではないか。実践知といった言葉では表現できないところに本物がある。どんなに逆立ちしても、大学にいる人間が小学校の現場の実践はわからない。いわんや実践知などと呼べるものがわかるはずがない。どんなに授業の真似事をやってデータを得たとしても、所詮は大学教師のお遊びでしかない。それは、教育現場とはほど遠いものである。こうしたレベルで教育学としての教育心理学など唱えたら、教育心理学は教育学に吸収合併されるだけではないか。

まだまだ何も言わない（言えない）お遊びでいいでは